

## 研究室紹介

## お茶の水女子大 動作学研究室

森 下 はるみ\*

タクシーにのって“お茶の水”と告げたら、JRの「お茶の水」駅につれてゆかれた話をよく聞く。明治のはじめの設立当初は、「お茶の水」駅のそば、現在の東京医科歯科大の場所にあった。関東大震災で焼け出されてから、今の文京区大塚の地に移り、学制改革で東京女高師から「お茶の水女子大」になった。限られたキャンパス内に、幼稚園から高校までの付属校をかかえるのも教師養成校の名残である。学部は文教育学部・理学部・生活科学部の3学部で、学生数は約2500人、大学院を含めても全体で約3000人にすぎない。したがって、一講座の学生数も各学年で20人前後、その下に研究室にあたるコースがある。

当研究室は、舞踊教育学講座に属し、学科では音楽表現学講座とあわせた〔芸術・表現行動学科〕に、学部では〔文教育学部〕に属している。女子のみの小規模で少人数な点と、人文系の学部にも所属している点が、まず当研究室の特色としてあげられるだろう。講座のカリキュラムには、ダンスを中心とした実技が多く、自然科学的な講義は、他の体育スポーツ系の大学と比べてもごく少ない。これらのことが、研究室の規模や設備にそのまま反映している。たとえば、配当経費にしても文科系に準じ、器材や設備のためには、特別予算が運よく当たるのを待たねばならない。小学校の教室よりせまい唯一の実験室には、暗室・シールドルーム、キスラーの床反力計(60×90cm)、生体现象の記録解析機器(BIMUTAS)、映像解析機器(エリエール・システム)などが場所を占め、その隙間に作業机やカメラやパソコンやら、生活物質のせんべいやらコーヒーカップやらが散在している。そこで、移動量の大きい運動の記録には、3階のダンス実習室(11×13m)を使っている。

これまでの研究対象は、ひとの動作の1)運動生理学的なもの、2)成長・加齢変化にかんするもの、3)身体表現にかんするものが主流をしめてきた。とくに、3)については、舞踊を日常化している学生が多いので、訓練法や自分のテクニックの解明には、被検者として積極的に協力する傾向がある。文系・実技系の弱点をカバーするプラス面の一つといえるだろう。また、〈運動体〉としてだけでなく、〈表現体〉としての身体のありように回帰する傾向がある。自律訓練法や Feldenkrais method と

いったボデーワークの効果、見物効果、演者の表現意図が姿やからだ使いにどう影響するかといったテーマに関心が高く、そのいくつかは本学会にもわずかながら報告してきた。

当方と本学会とのかかわりは、亡き加藤一郎先生に「夜話」の依頼電話をいただいた時にはじまる。今よりも、ロボット系の方々と、数式の多い学会のなかで場違いな感があったが、皆さんよく聞いて下さった。まだ学生のようなだったY氏との雑談で、“舞踊やスポーツ領域の(バイオ)研究は楽でいいですよ。わたしたちの場合は動作の記録というのは、あくまでも第一歩にすぎなく、そこから数式をたて、シュミレートするとこまでやって第一段階です”という言葉が印象に残っている。ロボットと違って踊りやスポーツは人類史とともにすでに存在していた。舞踊研究が遅れている一因に記録法が完成していないことがある。数式アレルギーについては、理解はできなくても、どんなパラメータが取りいれているかを見るだけでおもしろいと学生にも自分にもいい聞かせてきた。私見をいえば、当学会の中心カラーは工学系であっていいのではないか。周辺領域の会員には周縁的参加のおもしろさがある。時空をこえたキャンパスに設計図をかくような人々の集う、この学際的で受容的な学会に加わって、あっという間に何年かすぎた。



1998年2月19日受付

\*お茶の水大学・文教育学部

〒112 文京区大塚 2-1-1